文樂座初出演の經緯

八木善一

忘れもせぬ大正十一年の一月の中頃過ぎでした。先代清六の訃を聞いた時、その人の死を悼むよりも考へさせられたのは、故人によつて啓發し、地盤と地位を鞏固にした古靱の將來でありました。清六に代るいゝ指導者もがな——と、賴まれもせぬ事を密かに考へた揚句、フト頭に浮かんだのは京に悠々自適してゐる新左衛門でした。

近松座系の驍將春子太夫を彈いて、時利あらず、京の三條で隱棲してゐる事に氣のついた私は、丁度、清六のお弔ひの日、目指す新左衛門に會つたのを幸ひ、京都に歸る同氏を大阪驛に捉らへて、僭越ながら萬一古靱の合三味に懇望した場合の諾否を求めたところ、結構、萬事お任せするとの返事に、吾が意を得たりとばかり内心悅に入つたものでした。

さてその翌日、笠屋町の本社に白井松竹社長を訪ふて清六亡き後、その合三味に就て、新左衛門を推薦しましたところ、流石は白井氏も既にその實力を見拔いてゐられたと見えて双手を擧げて贊成し、實は古靱の

二代目豐澤新左衛門

畧年譜

○慶應三年五月廿三日、大阪新町に生る。本名林覺太郎。

○明治十二年一月(十三歳)、豐澤松太郎に入門し、豐澤松吉となる。

○明治十三年の始め博勞町いなり北門の席、(或ひは御靈土田の席)にて初舞台。

○明治十七年九月(十八歳)、いなり彦六座へ入座。

○明治廿一年二月(廿二歳)、豐澤松三郎と改名、この年より本澤となる。この興行中彦六座炎燒す。

○明治廿七年三月(廿八歳)稻荷座へ出勤。このとき稻荷座柿茸落しなり。

○明治卅一年四月(卅二歳)二代目を相續、切狂言「李源氏伏見の里」(二世春子太夫役場)を彈く。位置は中軸筆上二枚目なり。因みに筆下は廣作(後の名庭絃阿彌)、二枚目仙昇(後の四世廣作)、中軸筆上源吉(後の三世團平)、二枚目松三郎改め新左衛門、中軸太字團平(名人清水町)、中軸筆下

さる贔屓からも、清六に代る合三味は新左衛門である――と推薦し、且つ慫慂してゐる有様だから、萬事よろしく――との話に、私としてもこんな嬉しい事はなく、意氣揚々として引揚げた次第でありました。

それから幾日かの後でした。新左衛門氏にこの由を傳へ、當人も古靱の合三味として文樂座に迎へられるに就ては何等條件はなけれど、何分芝居の床とも遠退いてゐる事とて、今急に入座する事は太夫の息を測り兼ねる點もあり、當分は巡業で充分、古靱の呼吸も呑み込んだ後、華々しく、文樂座初出演をしたい希望から、この事を松竹に話してその諒解を得ました。

一方古靱自身、有力な贔屓の慫慂と、當人もこの人と望んでゐた新左衛門が合三味となる事を心から喜んで、忘れもしませぬ、先代清六が亡くなつて後、代り役として養子の芳之助（改名して彌三郎）に彈かしてゐた『本藏下屋敷』の興行なかば、私と二人で三條木屋町の新左衛門を訪ふてこゝに正式の交渉が成立した譯でありました。

古靱は次の興行に『一の谷』の流しの枝を語り後、約束の通り新合三味の新左衛門と巡業に出ました。初めの約束は約半ケ年との事でしたが中途越路太夫の容態急變から呼び戻され、その年の五月興行でしたでせう、ハツキリとした記憶はありませんが、古靱、新左衛門の新コンビによつて文樂座に初目見得をした時は『腰越狀』泉三郎館が附け物でした。

小團二、二枚目森助（後の松谷）、筆下二枚目友松（現道八）、筆下龍助なり。此興行初日圓平死す。

○明治卅一年一月（卅二歳）堀江明樂座出勤。位置筆下二枚目（後に友松と中軸二枚揮しのときもあり）太夫は二世春子太夫。

○明治卅八年九月（卅九歳）、市の側堀江座へ出勤。位置筆上後に別筆上。太夫は二世春子太夫。

○明治四十五年一月（四十四歳）、近松座へ出勤。太夫は二世春子太夫なり。

○大正六年二月（五十一歳）、京都新京極竹豐座へ出勤、位置別筆上、三味線の字を頂く太夫は櫓下二世春子太夫なり。

○大正九年十月（五十四歳）より春子太夫と共に休座。

○大正十一年四月（五十六歳）、二世古靱太夫の合三味線として御靈文樂座へ入座。役場は「腰越狀三の切」なり。位置太夫附にて三味線の字を頂く。

○大正十二年十月（五十七歳）、この時より綴太夫を彈く。

○昭和五年一月（六十四歳）　四ツ橋文樂座へ出勤。

○昭和十八年三月（七十七歳）、當興行初日のみ初め急性肺炎にて倒れ遂に起ず、三月廿三日逝く。